

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第4章「東電の敗北」

「医療班準備1」。3月14日午前11時1分、福島第一原発免震重要棟2階の緊急時対策本部で、3号機原子炉建屋から空に高々と煙が上がるテレビ映像を見た所長の吉田昌郎(56)が大声で指示を出した。爆発現場には注水や電源復旧のため多くの作業員がいたのだ。

きつどけ人が大勢、運ばれてくることが多い。医療班の加藤由美子(37)は階段を駆け下り、1階の救急医療室に入った。

間もなく男性作業員が担架に乗せられてきた。爆発で飛んできたがけには医師がいない。病院に搬送する

追い詰められる対策本部



福島第一原発免震重要棟の緊急時対策本部
=2011年4月(東京電力提供)

心身ともじぎりぎり

しかないが、その前に体の除染が必要だった。加藤は水でぬらした布で作業員の体を拭いた。

「うっっ」。男性は痛みに顔をゆがめた。

別の男性作業員は、けがはしていないものの、錯乱した状態で運ばれてきた。「俺のせいだ。俺のせいだ」。自分のせいで爆発が起きたと思っ

てきた。同僚がおまえが悪いんじゃない。誰が行っても同じ結果だった」と言

うと、「ごめんなきい。ごめんなきい」と同僚にしかみついて泣いた。

2階の対策本部脇の会議室には、体調不良を訴える人たちが収容された。

た。用意した布団はあつという間に足のなぐなり、段ボールを敷いて寝かせた。この中には爆発の際、中央制御室から運ばれてきた運転員もいた。「早く帰りたい。家に帰りたい」

「何やってるんですか、みんな。様子を見よ」と、加藤が会議室にまた爆発したらしらつするんですか」

「このから出して」

「まだ爆発ですか」「これ爆発ですか」「もう一度、端横になつていた運転員が叫んだ。膝を抱え込んでブルブルと震えて

「怖い、怖い、怖い」

「もういいです。これは安全なと戻った。3号機爆発を機に状況は急激に悪

化していった。上昇する放射線量、不眠不休の作業。誰もが心身ともじぎりのまで追い詰められていた。

「敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 国分伸矢」